

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	永 井 毅
2. 審査委員	主 査：連大教授（兵庫教育大学）溝邊和成 副主査：連大教授（鳴門教育大学）田村隆宏 委 員：連大教授（上越教育大学）水落芳明 委 員：連大教授（岡山大学）高橋敏之 委 員：連大教授（鳴門教育大学）久我直人 協力員：元連大教授（桃山学院教育大学）名須川知子
3. 論文題目	保育者養成課程 保育内容「環境」における自然体験活動を取り入れた 授業デザインに関する研究
4. 審査結果の要旨	先端課題実践開発専攻先端課題実践開発講座 永井 毅から申請のあった学位論文について、 兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和5年 2月 16日（木） 11時00分～11時20分 場 所：オンライン 1. 学位論文の構成と概要 学位論文の構成は次の通りである。 序 章 本論文の構成 第1章 研究の背景 第2章 研究目的と方法 第3章 試行実践Ⅰ（虫とかかわる授業） 第4章 試行実践Ⅱ（ミニトマトとかかわる授業） 第5章 試行実践Ⅲ（泥団子とかかわる授業） 第6章 総合考察 第7章 今後の課題 本論文は、保育者養成課程の保育内容「環境」において、自然体験活動を取り入れた授業デザインの構築に向けて試行実践を行い、学生の変化について分析・考察をまとめたものである。

第1章では、研究の背景として、幼児の自然体験活動の現状と、それに続く保育現場と保育者養成校の実態を先行論文より述べている。具体的には、人間形成における自然体験活動の意義にふれるとともに、そうした場の設定や教育活動としての重要性を示している。しかし、幼少期の自然体験活動は減少しているのが近年の現状であり、家庭以外で活動する場となり得る保育現場での取り組みは、特に重要とされる中、保育実践に携わる保育者に、自然体験活動の実践技量がないことが指摘されている。このような状況に対する解決策として、若年保育者が保育現場で勤務する以前にその能力を高めておく点が考えられる。

保育者養成校の所属学生は、すでに家族や友達と一緒に自然体験を行う割合が著しく減少している世代であり、自然体験活動に対する経験量の少なさは否めない。それを裏付けるように、学生の生物形態の認識度は低く、虫や植物への苦手意識・嫌悪感は顕著に見られ、問題視される点が読み取れる。また、学生の自然体験活動への苦手意識や知識とスキルの不足への対策については、多くの養成校教員が意識しながらも、それを授業で補うことができていない葛藤が見られる。

第2章では、第1章でとらえた研究の背景から、目的と方法についてまとめている。

保育者養成課程の保育内容「環境」において、自然体験活動を取り入れた授業デザインの構築に向け、自然体験活動の不足が予想される学生を対象に試行実践を行い、その効果について検討することを目的としている。そして、試行実践する授業の枠組みと使用教材の選定について述べ、加えて、学生への配慮事項も示している。具体的には、自然体験活動を取り入れた保育実践に着目した授業デザインの構築として知識を獲得するための講義型の授業を実施した後、それに連動する形で体験型の演習授業を実施する。さらに、本授業での配慮事項は、次の3点としている。

1点目は、受講する保育者希望学生が面白いと感じたり、受講生の幼児期の経験を想起させたり、保育者としての効力感やアイデンティティを意識させたりするなどの心理的な配慮を授業に取り入れている。2点目は、受講生同士が仲間と情報や体験を共有する場が持てるグループワークを取り入れ、本調査で取り扱った試行実践の内容でも、学生同士がコミュニケーションしながら情報と感情を共有し、アクティブ・ラーニングとしてグループワークできる機会を用意した。3点目は、1つの内容に対しても、一過性でなく継続かつ連動的に複数回の授業を行うことで、受講生の技能習熟や意識変化などにより大きな正の効果をもたらすことを意図した。

実施した試行実践については、3つの章でまとめている。第3章では、「虫」を扱った実践（試行実践Ⅰ）、第4章ではミニトマトの栽培に関わる実践（試行実践Ⅱ）、第5章では泥団子の制作を教材にした実践（試行実践Ⅲ）を述べている。試行実践Ⅰでは、身近な生き物である「虫」というものの、学生にとって苦手意識の強い教材に対して、講義で知識を得た後に「虫」とかかわる演習授業をグループワーク形式も伴いながら展開した。その結果、「虫」に対する嫌悪感が軽減し、必要以上に避けなくなったり、触ることができるようになったりするなど、学生の意識に変化が見られた。試行実践Ⅱでは、好き嫌いにおいて中立的な存在である植物のミニトマトを取り上げ、栽培に関する講義と水やり、脇芽がりといった作業（グループワーク）を中心に、栽培収穫まで継続的に実施した。

授業前に育てる自信がなかった学生も含め、多くの学生が、授業後には栽培に楽しさや達成感を持ち、自分達が育てたミニトマトに対して興味や愛着を持てたことが示された。試行実践Ⅲで扱った泥団子は、保育現場で実践されている遊びの中でも上位に挙がっており、学生たちも経験者が多く、親和性が高い教材である。活動の意義などの講義に加え、グループで泥団子の作り方の情報共有や教え合いを大切にしつつ取り組んだ。その結果、受講生が今回の授業実践での泥団子作りや転がし遊びに楽しさや自信を見出し、充実感を得ながら保育実践への意欲にもつながることがうかがえた。

第6・7章では、第3～5章で述べてきた授業デザインとして講義と演習を連動させた試行実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの結果・考察を踏まえ、その有効性が得られたとまとめている。また、どの試行実践においても、楽しさや保育者効力感などの心理的側面に加えて、グループワークで苦しいことや協力して栽培することや一緒に作って遊ぶことなどの活動を仲間と共有させること、一過性の授業でなく複数回の授業を連動させるといった受講スケジュールに配慮することで授業効果が高まることが分かった。今後においては、学生が実際の保育実践でどのような効果を示すのかなどの追跡調査とともに他の教材に関する試行実践・検討を課題としている。

2. 審査経過

審査に先立ち、審査委員も発表を聴講する公聴会（10:00～11:00）を行い、参加者による質疑応答が行われた。その後の審査会では、論文内容について主要研究成果を必要参考資料として検討を加えつつ、次の点に検討・確認がなされた。

研究目的と内容の整合性に関しては、自然体験活動にかかる意義と今日的課題を踏まえつつ、保育者養成課程における問題をとらえ、研究目的を定めている点が評価された。また、その目的に対する具体的な試行実践の展開・分析の一貫性も十分に認められた。本論文の独創性については、先行研究をベースに設定してきた講義・演習連動型の形式に実践上の配慮事項を合わせて試みている点が捉えられた。さらに、学校教育の実践に対しては、本研究が実際の保育場面で生起する課題の解決アプローチとして保育者養成課程での授業改善を展開している点で、より確かな貢献性があると認められた。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は永井 毅の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。